

Working Paper Summary

JICA-RI Working Paper No.82

(2014年10月刊行)

Management of the International Development Aid System and the Creation of Political Space for China: The Case of Tanzania

Mitsuaki Furukawa

Research Project: [開発協力戦略の国際比較研究：G20 新興国を中心に研究](#)

■付加価値

本稿は、「貧困削減レジーム」での開発援助という資源の獲得を巡るタンザニアの援助行政の実態を明らかにすることを目的とした。これまでの先行研究の多くが、ドナーの視点から援助行政を検討しており、途上国の援助行政の実態は意外なほどに知られていなかった。また、新たな支援の獲得を巡る途上国政府の具体的な対応のあり方についても必ずしも明らかになっていなかった。本稿の付加価値は、タンザニア政府がドナーの開発戦略や援助アプローチに合わせながら、自国政府の望む「開発」が達成されるよう行動していること、およびそのための受け皿を構築してきたことなど、開発援助をめぐる途上国政府の対応の実態を浮き彫りにしたことである。

■リサーチ・デザイン

本稿では、タンザニア政府がどのように正当性を確保しつつ、開発資金を獲得しているのかについて分析すべく、タンザニア政府からの視点に立った分析を試みた。新たな開発資金については、昨今、特にアフリカでの台頭が顕著な中国の支援について注目した。DAC ドナーの開発援助については、比較的情報が豊富であるのに対して、中国の支援については、部分的な情報をもとに議論を展開しているという制約がある。そのために、2010年9月と2012年3月、タンザニアにおける中国の支援の実態と影響を分析するために、現地調査を行った。具体的には、タンザニア政府関係者が中国の支援をどのように理解しているのかについてのインタビューを行い、関連資料を収集し、それらの情報を基に本稿の分析を進めることとした。

■主な結論（政策的含意を含む）

分析の結果は、タンザニア政府がこれまで、新たな開発資金の獲得のため、戦略的かつ柔軟に国家計画作成組織の改編を行うことによって援助の受け皿の構築を行ってきたことを示している。そして、ドナーとの密接な政策対話を通じて、ドナーの考え方や期待する要求内容を学習し、そこから得た教訓を生かして、より効率的に新たな開発資金の確保と自国政府の望む「開発」のための受け皿を構築する過程が浮き彫りになった。本研究の結論として、まず、伝統ドナーが精緻にレジームを構築し、貧困削減に向けて社会セクターに援助を集中させたために生じたニーズが、新興ドナーである中国の新たな活動空間を生み出したことが示された。さらに、タンザニア政府は伝統ドナーとの関係においては、一見同じ考えを共有しているかのように振る舞いつつも、他の新たな開発資金獲得の機会においては、伝統ドナーとは異なるロジックに基づいた開発資金の受け皿を巧みに構築している。このことは、伝統ドナーのロジックのみでは、途上国政府の行動を必ずしも捉えることはできないことを示しており、その意味で、ドナーが今後の開発援助の在り方を考えるうえで、タンザニアをはじめとする被援助国側のロジックを分析することの意義は大きい。